

(II-99) アメリカにおける河川構造物の景観設計の事例紹介

パシフィックコンサルタンツ株式会社

東 正人

1. はじめに

近年、河川空間は質の高い生活空間を創造する場として期待されており、“ゆとり”と“うるおい”の創出を目指して、貴重なオープンスペースとしての整備が盛んに進められている。特に、都市部の河川においては、公共的な広場の不足とも相まって、河川空間は最後のオープンスペースとしての期待が大きい。

そこで、これからの河川空間の整備と景観設計の方向性を探るため、リバーフロント整備の先進国であるアメリカの河川について調査を行った。本文は、そのうちの数例の事例を紹介しながら、河川構造物の公共性と耐用年数を念頭において、景観設計の基本的なあり方について考察してみる。

2. 事例と解説

写真・1 サバンナ川

ジョージア州オーガスタ市 1993年完成

堤防が比較的高いが、地域開発では堤防が有する視覚的障害を避けるように、堤防天端、小段を歩道として開放し、地域住民や旅行者をリバーフロントに惹きつけている。コンクリートと煉瓦造りであるが、曲線形で風景の視覚的効果を和らげている。

写真・2 シカゴ川

イリノイ州シカゴ市 1989年完成

ウォーターフロント開発の中心は古くよりミシガン湖であったが、最近になって沿川の公共地が開発の中心となっているようである。ハイライトの1つは、レイク・ショア・ドライブ橋とミシガンアベニュー橋の間にある都市水再生地区の100年広場と噴水である。ビジネスマンや学生に人気がある。

写真・3 デトロイト川

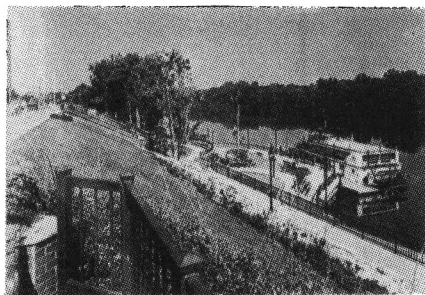
ミシガン州デトロイト市 1978-95年完成

セントラルビジネス地区の川に張り出した劇場。シェーンパークにある屋外円形劇場で座席数7,500を有する。

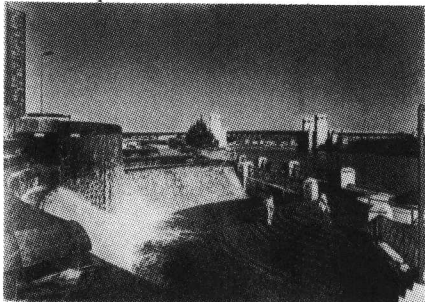
写真・4 ミシSSIPPI川

テネシー州メンフィス市 1982完成

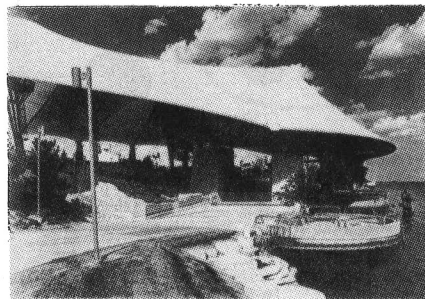
写真中央の曲がりくねった部分は、高水敷に作られたミシシッピ川の模型で、ミズーリからメキシコ湾までの約1,000マイルを模型にしている。川の蛇行や氾濫源を表現してある。



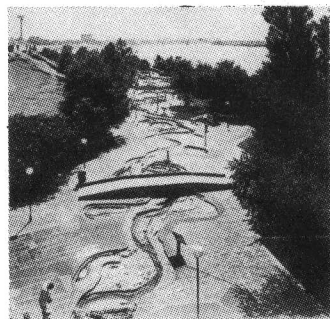
写真・1 サバンナ川



写真・2 シカゴ川



写真・3 デトロイト川



写真・4 ミシシッピ川(1)

写真・5 ミシシッピ川

ミズーリ州セントルイス 1964年完成

リバーフロント開発にあたり、沿川の高速道路、鉄道等の公共施設が障害であったが、高速道路は移設し、鉄道はトンネル化してある。あくまでもリバーフロント開発を優先させ、ナショナルパークの設計に合わせて障害物を解決した例である。

写真・6 キューンバーランド川

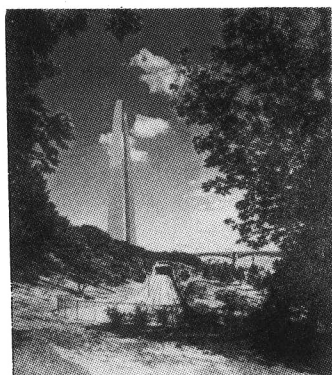
テネシー州ナッシュビル 1985年完成

沿川の建物は19世紀の煉瓦造りであり倉庫が多く、河岸埠頭として使われていた。芝生のテラスは各種公演の際の観覧席として利用されている。この公園の端には、歴史的なナシュボロ砦の復元遺跡がある。わが国で実施されているスーパー堤防（高規格堤防）の完成イメージに近い。

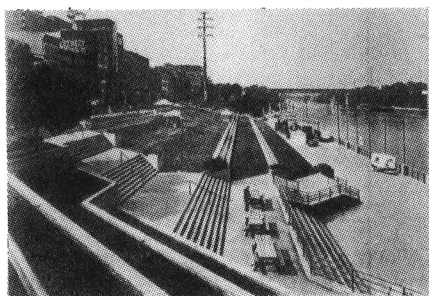
写真・7 アルカンサス川

オクラホマ州タルサ市 1983年完成

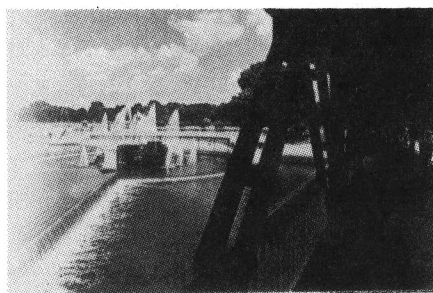
1980年代初頭に低ダムが建造されてジंक湖ができ、その周辺を整備している。ブレイク噴水は中心的施設であり、写真右側の廃線となったミッドランドバレー鉄橋を歩道橋として利用している。写真中央の三角形の建物は、公衆トイレである。



写真・5 ミシシッピ川(2)



写真・6 キューバランド川



写真・7 アルカンサス川

3. 事例に見る景観設計の考え方

今回紹介した事例は、アメリカ特有の大河川が対象であるが、以下の事項が景観設計の基本的な方針となっているようである。

第一に、地域住民や旅行者にオープンスペースとして開放することが前提であり、人を呼ぶこと、見せることを基本とし、また、レジャー施設としての利用を積極的に導入している。

第二に、コンクリート構造が主体であるが、“水と緑”を主役に捉えて全体的に柔らかい感じとしている。

第三に、周辺の地域の歴史的背景を損なわない。

ただし、本調査のもう一つの目的であった水門や堰などの河川構造物については、河岸の整備に比べてそれほど気を使っているようではない。これは、第1の方針にあまりそぐわないからであろうか。

4. 考 察

わが国の場合、河川構造物の景観設計を考えていく上で、河川の規模が違うアメリカの考え方をそのまま受け入れることはできない。しかし、河川構造物の景観設計を行う以上は、あくまでも“水と緑”が主体であり、これに地域の歴史、周辺の環境、地域整備計画による将来的な周辺環境の予測等は、十分に考慮し、配慮していくことが必要であると考え。構造物が、自然にそこにある場所性を表現することが重要で。

特に、水門や堰などの点の構造物は、周辺環境との連続性が大事であり、景観設計＝意匠設計と勘違いして、デザインや色彩だけに配慮するばかりに“ひとりぼっちの存在”にならないように配慮すべきである。景観設計は、構造物の機能設計に従属するものであり、デザイン主体で設計すると本来の機能を損なう恐れがあること、完成後の維持管理面への配慮を忘れてはならないと思う。